



今回の取り組みに「虎の穴」とつけましたのは、  
この短期間で成果を出し、毎回ほほ丸1日を拘束されることも厭わず、  
集まってくださった猛者への敬意の証です。  
参加者の皆様、本当にありがとうございました。

令和元年度 顔の見える木材での快適空間づくり事業  
木育空間デザインプロジェクト「木育デザイン虎の穴」

NPO法人木づかい子育てネットワーク  
<https://www.kizukonet.com/>

# 木育デザイン 虎の穴

令和元年度 事業報告書



この試練を乗り越えて  
お前は虎になるのだ



木づかい子育て  
ネットワーク

# 木育デザイン 虎の穴とは

近年の木育、木を使った自然保育に対する認知が高まる中で、教育関連の施設、設備、教材等に対する積極的な木材活用の取り組みが進められています。安全や安心、そして製品の質が重視される幼児教育の施設、家具、ツールは、国産材、とりわけA材の利用対象として期待されるものです。しかしながら、実際の施工例、製品例を見ていくと、うまく国産材の特徴を生かせていない、十分に活用されていない、現場のニーズと一致していないといった指摘をされる場合もあります。なぜでしょう。

私たちはそこに、木育についての理解を持ったデザイナーの不在という問題があることに気づきました。木育を理解し、保育や教育の現場を知り、デザインとして提供できる人づくりこそが、木材の利用において喫緊の課題であると考え、思いを同じくする人たちとともに、「木育空間」づくりの勉強会を開催しようと決意したのです。

このプロジェクトでは、保育・教育機関、団体の多様なニーズに応えるためのモデルとなる木育空間づくりに向けて、設計者、デザイナー養成のための研修会を、「木育デザイン虎の穴」と題して開催することとしました。優れた実践者、専門家を講師として招き、これからの保育環境としての木育空間デザインについて、実践を通して徹底的に議論し、考え、その哲学やスキルを、できるだけ多くの方々と共有していきたいと考えたのです。

この報告書は、そんな4か月間の取り組みをまとめたものです。ご一読いただき、ご意見、ご感想をいただければ幸いです。

本事業を進めるにあたりましては、林野庁ならびに一般社団法人全国木材組合連合会の皆様に多大なるご支援をいただきました。記して御礼申し上げます。

## 虎の穴受講生の諸君、 木育空間デザインを追求する みなさんへ



講師 古川 泰司 アトリエフルカワ

デザインを考えるときに「顧客」はだれなのかという問いは重要です。今の時代、生産者の都合に偏ったデザインが横行しているのではないのでしょうか？これはヴィクター・パパネックが「生きのびるためのデザイン(1974)」ですすでに警告していることです。それでも、経済性優先で社会は進んできて、取り残されたのはユーザーであり、そのなかでも社会的弱者である子どもたちは大きく取り残されました。

木育空間デザインを考えることは、子どもたちのための空間を考えることです。木材という素材がひとをリラックスさせることは最近の研究ではっきりとしてきていて、子どもたちにとって最適の素材であることは疑う余地もありません。それなのに、メンテナンスやコストのことが最重要とされ、空間を作る素材として木材が選ばれないことも多いと聞きます。こ

れは明らかに、子どもたちに必要な空間についてしっかりと議論がされていないためですし、現場で子どもたちと向き合っているスタッフの声が届いていないからです。

さらに、木育空間は、子どもたちと過ごす大人の空間でもあり、大人にとってもストレスが溜まるような空間ではダメです。素材の問題だけではなく、スタッフが子どもたちと関わる時にストレスが溜まらないような、目配りや視線の抜けなどの配慮が木育空間には必要なのです。

もう一度問います。木育空間の「顧客」は誰か？それは、子どもたちであり、そこで働くスタッフの皆さんなのです。そこに立ち返って木育空間デザインを考えてもらうことをカリキュラムの中心としました。我々のメッセージが少しでも伝わってくれたらなによりです。

講師 浅田 茂裕 埼玉大学教授

遊びは子どもの1日のほとんどを占める大事な活動です。子どもたちは遊びを通して身のまわりのものや自然、社会、環境と関わり、それらの意味や関係性について気づき、最適な関わり方を学ぶとともに、少しずつ行動の範囲を広げていきます。また自身の身体を使ったり、他の子どもと関わったり、成功や失敗を繰り返したりしながら、調和のとれた心と身体へと成長していきます。遊びは子どもにとっては学びの場であり、成長を支える基礎をつくる最も重要な過程です。面白さ、楽しさなどの感情が芽生えることで、遊びは何度も繰り返され、深い学びを得るようになり、「もっとやりたい」「上手になりたい」といった強い思いをもった「遊び手」に、そして主体的な「学び手」に成長していくと考えられているからです。

しかし、この大切な遊びに、今大きな変化が起きていると言われています。それは、しっかりと遊ぶことのできない子どもの存在です。そしてそれは、子どもたちだけの問題ではな

く、子どもをとりまく環境、保育者、保護者などを含む複合的な問題です。現在、木育が注目され、保育の中に積極的に取り入れようとする動きがみられるのは、そうした問題の表れかもしれません。本来、森林や木材に囲まれ、しっかりと遊べていれば、木育など必要ないはずなのです。

私は、木材という自然素材を活かして子どもの遊び、学びを豊かにするためには、保育者、保護者だけでなく、その環境をデザインし創造する人たちが、その価値を理解し、共有し、実践に活かすことが必要だと考えています。木育は、自由で楽しく、人の感性と創造性を刺激するとても大切な取り組みです。そこで今回の「虎の穴」では、教育者、保育者の思いや、日々の保育についてみなさんに理解していただく機会を多く取り入れました。この実践的な学びを通して、豊かな木育環境の実現に向けた協働の輪が大きく広がることを期待しています。

## 浅田 茂裕

埼玉大学 教授/  
木づかい子育てネットワーク  
理事長



1966年熊本県生まれ。埼玉大学教育学部教授。専門は木質科学。木材教育学。木を使った学校校舎、子育て支援施設などの快適性や、木材が子どもの学び、育ちに与える影響について科学、心理学などの手法で研究を進める。木質化された子育て支援施設や木を使った遊具、玩具、教材の企画・開発、学校における木育プログラムの実践などを手がける。木育の牽引者の一人。

## 古川 泰司

アトリエフルカワ代表



新潟県上越市生まれ。武蔵野美術大学卒業、筑波大学修了。一級建築士、森林インストラクター、おもちゃコンサルタント、公認住宅医。森の恵みを多くの方に届けることを、建築を通して実践しています。特に最近は子どもたちに木の空間を届けることがテーマです。川上から川下まで、人と人がつながることが大事と全国各地を奔走中。

## 坂本 幸

株式会社サカモト



木製建具メーカー・サカモト(埼玉県飯能市・1966年設立)で地産の木材「西川材(スギ・ヒノキ)」を使った建具や家具商品を主に開発している。設計事務所や建設会社、木材生産者、自社の職人らと協同して、木工技術を活かしたものづくりを行っている。2019年西川材森林認証材の家具「KADOU」を発表した。

## 関山 隆一

NPO法人もあなキッズ自然楽校  
理事長  
森のようちえん めーぶるキッズ 園長



1998年ニュージーランドに渡り国立公園にて現地ガイドとして働く。帰国後2007年NPOもあなキッズ自然楽校設立。森のようちえんや自然体験活動を通して、長期的な子育て支援環境の確立及び地域に根差した実践を行っている。現在、NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟 副理事長。東京都市大学人間科学部児童学科 非常勤講師

## 奥 ひろ子

株式会社パワープレイス



武蔵野美術大学造形学部工芸工業デザイン学科卒業、内田洋行入社。製品の企画・デザインを担当、製品開発に携わる。現在、内田洋行のデザイン会社であるパワープレイスにて、国産材を媒介にまちづくり関わる製品・空間デザインに取り組んでいる。

## 荒川 直志

社会福祉法人どうんこ会  
馬場どうんこ保育園 施設長



幼稚園教諭・保育士を経て2012年にどうんこ会グループ入社。埼玉県朝霞市にある三原どうんこ保育園にて6年間施設長を務める。2019年より新規開園の神奈川県横浜市馬場どうんこ保育園の施設長に就任、現在に至る。保育園から「保育縁」へ。保育者同士、保護者、関係者、地域といった子どもに関わる全ての人と協働し、みんなで創る保育を目指し日々過ごしている。

## 吉川 はる奈

埼玉大学教育学部 教授



専門は保育学、子育て支援。子どもの心身の健康な育ちを支える環境づくりをめざしています。「子どもを真ん中に」がモットー。「誰かがみ～んなはじめは子どもだったはず。」「子どもの力が活かされる環境」についてこれからも考えていきたいです。  
著書：新訂事例で学ぶ保育内容<領域>表現(萌文書林)共著、児童学事典(丸善出版)編著(編者代表)

### 第1回

9月14日(土) 10:00-17:00

場 所：熊谷市、わらしべの里共同保育所、埼玉県農林公園研修室

テーマ：木育空間について考える、課題の発表

内 容：①視察：わらしべの里共同保育所、埼玉県農林公園木育ひろば  
②事業の概要説明  
③講義(1. 木育空間とは 2. 木育とは 3. 西川材について)  
④実践課題の提示、グループワーク

講 師：古川 泰司、浅田 茂裕、坂本 幸

### 第2回

10月13日(日) → 台風により中止、講義は動画で配信

テーマ：保育者、保育空間デザイナーの思考をのぞく

内 容：①講義1 保育者が保育環境に求めること  
②講義2 保育空間とデザイン

講 師：関山 隆一、奥 ひろ子

### 第3回

11月14日(木) 埼玉県民の日 9:30-17:00

場 所：朝霞市内の3か所の保育施設、ゆめばれす(朝霞市民会館)会議室「梅」

テーマ：保育環境を理解する

内 容：①視察：どうんこ会の保育移設  
②講義1 保育空間とデザイン(動画講義の補足説明及び質疑応答)  
③講義2 視察した施設について  
④講義3 保育環境について理解する  
⑤課題の中間報告・確認、チームや講師との課題相談など

講 師：吉川 はる奈、荒川 直志、奥 ひろ子

### 第4回

12月14日(土) 13:30-17:00

場 所：埼玉大学

テーマ：成果発表会と指導講評(OP:木育体験「ツール作り」10:00-12:00)

内 容：研修成果の発表と関係者による指導講評

講 師：古川 泰司、浅田 茂裕ほか

コメンテーター：坂本勉(株式会社サカモト 代表取締役)、奥ひろ子、  
井上淳治(きまま工房 木楽里 主宰)、  
酒井慶太郎(酒井産業株式会社 代表取締役)

# 第1回 「木育空間について考える」



わらしべの里共同保育所 写真:畑 拓

## 見学施設について

わらしべの里共同保育所は、子どもたちを型にはめない、まず何よりも子どもたちが持っている力を大事にする保育をしていました。そのために、ここが子どもたちのための木の家であることが必要でしたが、既存の保育園を参考にすることはせず、子どもたちの空間としてどのような建築が必要なのかを、丸一年をかけて、スタッフの方々、父兄の方々とゼロから話し合っていました。

「子どもたちの遊びを邪魔しない建物」という考え方はその中から生まれました。この言葉は私たちが実現しようとしてきた木育空間を言い得ていると思います。



## 課題内容

『都市部における小規模保育・子育て支援スペースの木育システム開発』

- ① 仮設的な木育空間システムの開発
- ② 協働あそびを実現する木製遊具の開発

## 条件設定

マンションもしくは事務所ビルの一室(50~80m<sup>2</sup>)を想定する。駅前のビルの一室は、交通の便もよく、小規模保育、子どもの一時預かり、子育て支援センター等を運営するには最適な場所である。しかし、その多くはパンチカーペットやPタイルの床、壁と天井は安価なビニルクロス仕上げであることが多い。子どもたちにとっては生活の一部となる場所で、そこで過ごす時間を豊かなものとするために木材を使った心地よい空間のデザインが求められる。使用する木材は、埼玉県飯能地域のスギ、ヒノキ材(西川材)とする。飯能では、森林認証協議会を立ち上げ、合法的で、質の高い木材、木材製品の生産に取り組んでおり、これを活用した設計、デザインを進めることを課題とする。



## 課題へのアプローチ

### ① 仮設的な木育空間システムの開発

条件に挙げた駅前の場所は賃貸物件であることが多く、仮設的に木育空間を組み立てることが可能なデザインが求められる。組み立て式や、仮設的でありながら子どもたちの空間として十分に豊かなものが作れないか、考えてください。

### ② 協働あそびを実現する遊具の開発

木育空間を考えるときに複数の子ども達で遊べるような遊具があれば、そこに木育空間が現れるのではないかと考えます。一人で遊ぶ木の玩具はたくさんありますが3人で遊べる木の玩具は意外と少ないのではないのでしょうか。場所にとらわれずに子どもたちに木の魅力を十分に感じてもらえる木の遊具は割と狭い場所でも活躍してくれる頼もしい存在になるに違いありません。

最終的には、1と2をあわせたもので木育空間は構築されると考えられると思います。まずは、以上の2つのアプローチのどちらかを選んで頂き、具体的なデザインとして考えていきましょう。



## 西川材について

西川材は、埼玉県の南西部、荒川支流の入間川・高麗川・越辺川の上流域(飯能市・日高市・毛呂山町・越生町の4市町)にまたがる西川林業地(森林面積約2万ha)で生産される良質な木材です。丁寧な育林作業で年輪が緻密、色、艶も良い高品質な木材生産で「立て木」という100-200年保存し大径木にする施策が特徴です。明暦の大火や関東大震災の際、復興用材として江戸へ流送されたことで「江戸の西の方の川から来る材」、西川材として広く知られるようになりました。

木材はさまざまなシーンで、人と社会にゆたかさをもたらしますが、素材生産・製材・製品加工の流通の中で、入手しやすい材料と、加工に適した材の選び方を知り、適材適所を心掛けることは木育空間のデザインには不可欠です。例えばスギとヒノキの加工性の違い、板目とまさ目の木取り方、仕上げの種類、集成材と無垢材、寸法の歩留まり等は、基礎知識として知っておいていただきたいと思っています。

## 保育者が保育環境に求めること

人類の歴史の中で、人間と自然は共存し文化的発達を遂げてきました。しかし近代文明の発展とともに、人間と自然が切り離され、合理的社会へと移り変わってきました。そのような社会に歯止めをかけるべく環境活動家であったレイチェル・カーソンは、環境啓蒙活動と同時に幼児期からの教育が本来人間の営みとして重要であることを唱えます。さらにレイチェルは「知ることは、感じることの半分も重要ではない」という言葉を残します。これは、本来教育は「感じる」ということを通して「知る」ということであり、教育における重要な要素であると考えます。

木育環境を考える上で、2つの環境に分類して考えます。1つは、自然環境における木育、もう一方は室内環境における木育になります。1つ目の自然環境における木育は、私たちの森のようちえん実践より説明します。森のようちえんの研究などでも、自然環境で遊ぶことで自尊感情、レジリエンス、そして創造性などが育まれると云われています。その中でも創造性に着目して述べてみます。まず“すべてと言ってよいほどの乳幼児は自ら棒を持つ”という現象があります。子ども達はそれを様々なモノに見たて、枝を組み合わせ、家を造ったりすることがあります。驚くべきことは、子ども達は何も設定されていない環境の中、0から想像し遊びだすということです。

次に室内における木育環境について述べます。自然環境の中で創造性をもった子ども達が、室内環境の中で積み木やカプラなどの木育玩具などを使用すると、没頭し、素晴らしい作品を創るケースが多くあります。木に囲まれた空間の中で、安心して、没頭できる環境も子ども

にとって重要な環境であることが云えます。

結論として、自然環境及び室内環境の片方だけの環境だけでは、それは不十分といえるでしょう。例えば子どもの前に沢山の積み木が出され遊んでいても、「お外にいききたい!」というニーズが湧いてくるに違いありません。上記2つの環境が揃ってこそ、子どもにとって満たされる環境ということになるでしょう。それには、保育者自身の思いを投射するのではなく、子どもの本当のニーズに耳を傾けることこそ、より良い環境が保障されるということがいえるのではないのでしょうか。



## 奥ひろ子

パワープレイス株式会社

木育施設のデザイン・設計を行った事例について、施設を作る工程やデザイン上での工夫等の解説を行いました。

### 東京おもちゃ美術館「赤ちゃん木育ひろば」

0~2歳の乳児を対象とした木育ひろば。子ども達の想像力が膨らむよう抽象的な木のオブジェ「スギコダマ」や雲が浮かんで見えるよう天幕を配置し、岩や山など枯山水のように見立てをテーマとしました。また、施設は運用が大切なため、運営スタッフと一緒に様々な学び・体験を行いました。多摩産材の伐採地を見学、材が都心に届くまでのストーリーを語れるようにし、また、ひろばの池に設置するスギコダマは、ワークショップにて約200名のボランティアが300個を製作するなど、この場に愛着を持つ仕掛けを同時に開催。このひろばは多世代が一緒になって遊び、お父さんがこの場にいても恥ずかしくなく、長時間滞在できると好評です。

### 函館空港のキッズコーナー「ハコダケひろば」

単なる旅の通過点ではなく、地域の人たちが集まり、楽しめる滞在型の空港を目指して実施されたりリニューアル。迷路のような木製遊具で、45度の傾斜を作り安全ではないすべり台・バリアフリー空間を実現。道産木材を幅広く使用しています。

### 日南市子育て支援センター「ことこと」

地元にある大切な資産、地域の魅力や文化や暮らしを知り、子どもも大人も連携する拠点を作るために、地域住民を巻き込んで約2年で全17回のワークショップを行い、施設や木育の意義、楽しさを伝え支える人材を育みました。餌肥杉をふんだんに使用した空間に宮崎県の農水産物をモチーフにした遊びを多く取り入れ、郷土に親しみを持ってもらう仕掛けがたくさんあります。

### 山形県高畠町屋内遊戯場「もっくる」

冬の間、雪深く、外遊びができない高畠町で、子ども達がおもいっきり遊べる施設として誕生。町産杉の活用を積極的に推進、床・壁・家具からおもちゃまで、地域の材でできた施設。高畠町出身の童話作家・浜田広介の代表作「泣いた赤おに」「むく鳥のゆめ」「りゅうの目のなみだ」をモチーフとして遊びを展開。町民の方々に向けた木育講演会、おもちゃ作りなどのワークショップや施設の紹介を行い、木育の意義・楽しさを知り、「もっくる」を支えてもらう人を育みました。



# 第3回 「保育環境を理解する」

荒川直志

社会福祉法人「どろんこ会」馬場「どろんこ」保育園 施設長

## どろんこ保育園の視点

どろんこ保育園では「にんげん力。育てます。」を理念とし、日々子どもと生活しています。

子ども自身が実際に体験する中で、人を頼り、尋ね、自分で考えて行動できる環境を用意することが保育者の役割と捉えています。かつての年齢別一斉保育を脱し、未来に生きる子どもたちに必要なことは何だろうという視点に立って、子ども主体による異年齢保育の実践をしています。その中で、子どもは稚拙な存在でなく、大人を驚かせるほどの観察力や豊かな感性を持つことに気づきます。その芽を摘まず、伸びやかに育てることのできる環境を保育者・保護者・子どもとの対話の中でデザインしていくのが真の大人の役割だと考えています。

「では、それってどんな環境だろう？」そんな話を保育士達と深めていく中で、「その環境を自分たちで創っていただけら良いね」という声が上がリ、実際にDIYで保育家具や遊具を作りはじめました。動線が整理され、遊びに集中する環境ができたことで子どもの姿が変わることもあれば、思ったように子どもが遊んでくれず、以前の方が良かったと訴えてくることもあります。そんな時は躊躇なく形を変えていくことができる、それが自分たちで作ることの良さでもあると思います。そんな中で育った子ども達の特徴的なことを三つ紹介します。①物が壊れたら「直して」と持ってくる。②あんな物や、こんな場所が欲しいから「作って」と申し出る。③大人が物を作っていると手伝いにき来て、ヤスリなど「自分でできることはやる」そんな姿が多く見られます。物が豊かな時代だからこそ、こういった発想が生まれることはとても大切なのではないのでしょうか。

保育者にとっても実際に自分で作ったものは、そこで遊ぶ子ども達の姿を深く観察する傾向にあります。また環境について保育者同士で、「もっとこんな風な場所があると良いね」と話し合ったり、子どもと「こんな場所あったら面白そうじゃない」などと対話が生まれたりします。環境を作るということは物理的な充足のみならず、人と人が対話し、協力し、結び付いていくことに意味があるのだと考えます。そんな意味で、「買って終わり」ではなく、自分たちで絵に描いて、設計して、ミニチュアを作って、木材を買いに行き、工具を使って創り出す。完成度はプロのようにはいきませんが、新しいものを生み出すことが私たち保育者に与えてくれる気づきは、協働の本質だと確信しています。



吉川はる奈

埼玉大学教育学部 教授

## 保育環境について理解する

保育者は保育環境をどのように捉えているのでしょうか。保育の中で環境というとき、それは一般的な意味とは大きく異なります。子どもを取り巻く「人」環境、「もの」環境いずれも子どもの成長を支える環境として考えます。子どもたちは、マイクロシステム（家庭、幼稚園、公園、役割など）、メゾシステム（家庭と幼稚園のつながり、家庭と近隣のつながり）、エクソシステム（保護者の職場、きょうだいの学校など）、マクロシステム（子ども観、文化、社会、イデオロギーなど）と関わりながら成長します。そうした“複雑”な環境の中で、子どもは誕生早期から周囲の環境を知覚し、探索しながら育っていきます。

子どもにとって環境とは、単に存在するものではありません。環境とは“関わるもの”であり、関わることで初めて意味をもつものです。保育者は、子どもが生活の中から発見し、学びの機会を得るように環境を設定します。それは、幼児の自発の力を尊重し、幼児自身も自発の内容を尊重することであり、適切な誘導と働きかけで、生活を充実させ、幼児の生活をさらなる高次の生活に発展させることを意味しています。

21世紀型学力が叫ばれる中、保育においては「思考共有支援」、すなわち保育者が子どもの考えアイデアをつなぎ、課題解決に向けた方法や技術を協働で見つけ出すのを支える働きかけが注目されています。保育環境はそれを守り、支えるものであり、活動を豊かな学びに導き、多様なかかわりが可能なものであるべきではないでしょうか。



# 第4回「成果発表会」

1回目の課題発表時に組んだグループで、SNSも活用してもらいながら課題を進めることとした。台風による講座の中止により、グループ間での意思疎通が図れないことなどもあり、結果的には講師とも相談しながら個別での課題製作となる方が多かった。それでも役割を分担して課題をまとめるなどの工夫も見られ、グループを組んだ意義は十分に見出せる結果となった。最終回ではその成果を3人ずつの組となって発表、講師やコメンテーターに講評いただいた。



午前中には木育体験としてKAK(秋岡芳夫)さんがデザインされたスツール作りを行った

## コメンテーターより

### 奥 ひろ子

(株式会社パワープレイス)

数回のワークショップでアイデアを形にする作業は難しい中、保育施設の見学・子どもたちの行動観察を活かしたアイデアが多く発表された印象でした。新しい木の使い方から生まれた遊具やグループ内で分担・連携して1つの空間を作り上げる等の個性的で作品のバリエーションも多くあり、実現に向けても工夫のしがいがある面白い内容だったと思います。

### 坂本 勉

(株式会社サカモト 代表取締役)

受講者の皆様は、様々な分野で活躍されるプロフェッショナルなので、それぞれの発表が、自由な発想で木育空間や商品を提案されていて素晴らしかった。今後の仕事に活かしていただき、これからも木を使っていただきたい。木工所を経営する立場として、業界で働く若者を増やしていくためにも、木育やデザインのたのしさを皆さんに発信していただき、また、私たちにはものづくりの技術がありますので、製品化の際は、ご相談下さい。

### 井上 淳治

(きまま工房 木楽里 主宰)

短期間での検討と聞いていましたが、すぐにも商品化できそうなものから、思いもよらぬ発想からの提案など、おもしろいものが多く楽しませていただきました。今後具現化するには、木の特性を考えて、木のよさが最大限活かせるよう考えていただきたいと思います。「おっ、これいいじゃないか」という木製品をいっぱい世に送り出して、日常のあらゆる場面で本物の木がある生活の実現を目指しましょう。

### 酒井 慶太郎

(木育全国生産者協議会 理事長/  
酒井産業株式会社 代表取締役)

木や自然との触れ合いが少なくなった現代、木や自然を効果的に取り入れた木育空間の必要性が高まっています。デザインされた空間は、なおさらです。今回は参加者の業種の多様性と共に、同業者の参加もありました。より信頼感を持ち共同作業が行えるように、意匠に関しての配慮も今後プロジェクトを継続し進化させるためのテーマになると感じました。女性の参加者が多かったことは、木育空間デザインが子育て施設へ導入されやすくなることに繋がると感じました。また、次のステップに期待したいと思います。



## 受講生レポート①

### 中野 喬介 (帝国器材株式会社 企画開発部)

木育とは何か。何のために木育が必要なのだろうか。木をもっと上手に活用するにはどうすれば…。普段から教育施設を主とする様々な施設の木質化に携わらる中で、こういった疑問が頭の中に浮かび上がってきていました。

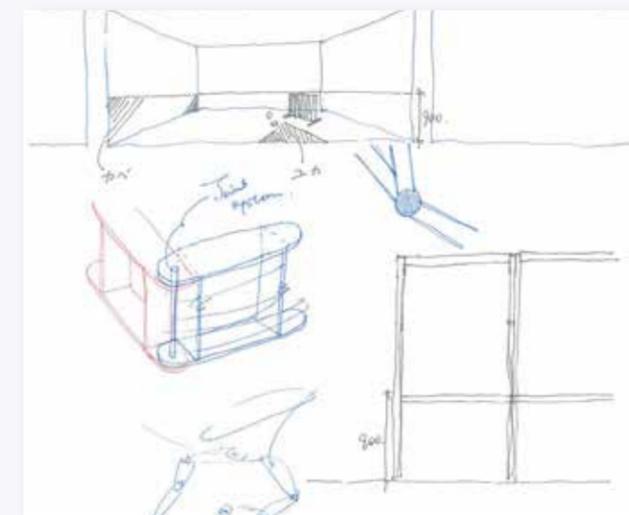
「虎の穴」と題されたこの講座を受講させて頂き、情報としてではなく確かな感覚として、これらの疑問に答えてくれる何かを得られたような気がしています。座学だけでなく、実際に運営されている保育園を巡るプログラムが充実していたことが、本講座の特長でした。またプロダクトや空間システムをデザインしてみる課題も、やりがいのあったプログラムでした。

訪れた保育園のなかには、周りの自然に溶け込むような施設もあれば、住宅街のなかでも工夫を凝らして心地よさを演出している施設もありました。どの施設でも床に木材を使用していましたが、木のあたたかみと質感を重視してスギの無塗装の仕上げで使用している場合もあれば、メンテナンス性を重視してクリの塗装仕上げを使用しているなど、運営側の考えや利用者の考え、あるいは周辺環境の違いによって、木材の多様な使い方を見ることができました。

ある空間やプロダクトをデザインする上で、こういった様々な視点からの要望がぶつかり合うことは避けられません。そんな中、クライアントの要望・設計上の課題・製造工程・材料手配・品質管理など、さまざまな観点から捉えてまとめるのがデザイナーの役割であることを講義で学びました。また木育とは「木材の良さを最大限活かして人(子ども)の育ちを支援する取り組み」と講義で学びましたが、ここで、様々な要望がぶつかり合うデザイン過程を経て最終的に木材を上手く活用してゆ�ために、「木材の良さ」をデザ

イナーがどこまで認知しているのかが、とても重要なポイントなのだ気付きました。また木材の良さを活かした先に、どのようなことが起こり、どのような景色が広がっているのかを体験していることが重要だと気付きました。

本講座を修了し、木材の実際の使われ方やデザインの過程を知ることができたのはもちろん大きな収穫でしたが、木で設えられた場を笑顔の子どもたちが駆け回り、あるいは寝転び、感情の赴くままに過ごしていた子どもたちの表情をみて、木育デザインの可能性を感じることができたのが、一番の収穫でした。デザイン課題では思うように力を発揮することができませんでしたが、受講する前と違ったのは、その先に子どもたちの姿を鮮明にイメージすることができたことだと感じています。



## 受講生レポート②

### 西村 範子 (酒井産業株式会社)

初めて自分で構想から案を練り、一つのカタチの玩具として具現化することができ大変有意義で勉強になる講座でした。

「協働あそびを実現する木製遊具の開発」ということでまず思い浮かんだのが、園児が楽しめる遊具ってなんだろうということです。漠然と案はでてくるものの、結局何がいいんだろう。と考えるばかりでした。

実際に埼玉県朝霧市内の保育施設を訪問しましたがそこで驚いたことがあります。

それは園児も先生も裸足で、どの園児もいきいきと駆けまわり、年齢の垣根をこえて遊んでいました。そして先生は園児たちの行動を指示しません。園児たちは自分が遊びたいように自由な発想で遊んでいました。

そしてそこには色々な遊具があり、実際に目で見て触れることができました。

色々な園児をみているうちに遊具作成を難しく考えすぎている自分があることに気が付きました。

園児にとって、積み木一つでも無限の遊び道具になります。そこで考え出したのが入れ子式の箱でマトリョーシカをイメージした玩具です。積み木のように積み重ねても良いし、単体では机になる、

など発想次第で色々な遊びができる玩具を思いつきました。そして、講師の方や園長先生のお話を聞いていくうちに、園児たちだけが楽しめる玩具という発想だけでなく、それを見守る保護者や先生たちにも安心して使ってもらえるようにメンテナンスのしやすさや収納面の空間づくりの重要性を学びました。

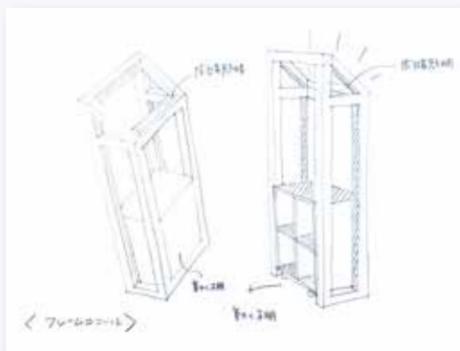
また自分たちの地域の木材や木製品を使うことで地域の魅力や文化を感じてもらい、子供たちの“木育”という教育にもつなげていける玩具を作っていきたいです。

開発した遊具はまだ課題が多いですが、受講したことにより参考書や文献だけでは知りえなかったことを多く学ぶことができました。

このプロジェクトで学んだことを今後の業務にどんどん生かしていきたいと思います。



た子供達が手を洗う水回りにもなり、カッパを干す場所にもなります。フレームユニットに間接照明を仕込んで、明るさも確保することが出来ます。また、木育を実践している保育園では、室内保育の木育と、園外保育の木育という二本柱になっており、園外で自然を「感じる」こと、子どもの主体性を育てる「遊ぶ」こと、親や地域の人を巻き込み「一緒に育てる」ことを大切にしていました。室内にあっても自然を「感じる」ことのできるエッセンスとして、皮つきの丸太の柱を部分的に使ったり、「フレームユニット」を木で作ります。保育者の見守りの元、子供達が安心して「遊ぶ」ことに没頭できる場をつくる「固定できる動く棚」。同じビルのテナントの入居者も巻き込んで木質化を図ったり、地域材を使って地域とのつながりを持ち、「一緒に育てる」ことを実践していく提案を致しました。今回の研修で学んだことを、少しでも自分の仕事に活かして行きたいと思っています。



# 講師による 総括



## 古川 泰司

今回の受講者には、設計・デザインに関わる人、素材の調達に関わる材木関係の人、実際に木工作家として活躍されているつくる側からの人、それぞれの参加を得ることができました。

今回の講座のポイントは、川上から川下につなぐ木材の有効活用を木育空間をデザインすることを通して考えてもらうことです。木育空間とはなんぞや？それを実現するには木材をどうやって調達したら良いのか？木材の調達とはそもそもどういうことか？そうした木材活用の背景にある本質的な問題について、参加者相互の議論により理解を深めてもらうことが、最終作品をつくるよりも前に重要なステップとしてあったと思います。

そのために、カリキュラムとしてはグループディスカッションを毎回行いました。講師陣もその中に加わり様々な意見を交わし、受講者がつらくろうとしている課題案についての議論を行いました。それにより参加者相互の理解を深めてもらうことができたのではないかと思います。

木育空間デザインを考えることを通して、川上と川下をつなぐ必要性が理解されたと思います。

## 坂本 幸

日々木工の仕事に携わっていると、「昔も今も地域の森に生かされている」と感じることができます。

しかし、日常で森と人の距離は離れて久しく、「環境として木があるということ」は、もはや現代の生活で意識されていないのではないのでしょうか。

だからこそ、「木を失った」現代社会で「知覚を揺さぶる木育空間や、木育アイテムバリエーションの豊かさを持つ発想を養う。」というこの講座のねらいがとても大きな意味を持つように思います。

これからの時代を担う子どもたちに、「森林はその地域の豊かさそのものであり、木や森はさらに必要不可欠になる環境である」と気づきを促す木育デザインに携わる人間が、「仕掛け人として」ますます必要になってくるのは間違いなく、今回のような学びの機会は今後も作っていききたいと思います。今回の木育講座をきっかけに、木育に関わる仕事の輪が更に広がり、深まり、社会に豊かな恵みをもたらす木育がこれからも継承される事を強く望んでいます。

## 浅田 茂裕

木育空間デザインを考えると、それは学習者、使用者の思いや日々の活動が理解されてはじめてその価値を発揮します。学習者や使用者の経験や理解を支えることも必要でしょう。木や森が大人でさえ遠い存在になってしまっている現在、提供するだけ、受け取るだけの取り組み、製品に陥ることのないようにデザインすることが求められます。デザインは誰のものか。D.A.ノーマンは、人間中心のデザインこそが必要であり、非人間的なものは淘汰されると述べています。しかし建物や室内空間に限ってみれば、一度できあがってしまえば、それら自身は使用者に負担を強い続けることとなります。今回は、台風の影響もあり、こうした点について十分に議論ができなかったという後悔の念が残っています。しかし、この取り組みに参加したみなさん、そしてこれから木育空間デザインに取り組もうとするみなさんと、私たちの思いは共有されたように感じましたし、よりよい木育空間デザインの第一歩になったのではと思います。